幼稚園、保育所におけるケース・ワーク（一）

立教大學教授　森脇　要

序論

『幼兒の教育』から、ケース・ワークについて書くようにとの御命令が出まして、うや〳〵しく承つた迄はよかつたのですが、さて書こうと筆を持つてみると、これは困つた事になつたと思ひました。それは、ケース・ワークは主としてもつと大きい子供について行はれる方法であるといふ事が一つと、今一つは、それでなくとも多忙な幼稚園や保育所の先生方に又新しい重荷を負はせる事になりはしないかと心配な事です。アメリカ等では、保育所では、保母以外にケース・ワーカーが別にゐるそうですが、こんな事は今の日本では一寸望めそうにありませんからね。しかし幼稚園や保育所でも、このケース・ワークの技術が用いられることは、そのこと自體はよい事でありますし、それに、ケース・ワークと言へば言葉こそ新しいものではありますが、實際には先生方が昔からやつてゐる事なのですから、ケース・ワークの必要やその技術をお話しする事は、或は、今までのやり方を確認したり、改良したり、反省したり、整理したりするのにいくらか役に立つかも知れないと思いますし、又一方ではケース・ワーク等といふ難かしい言葉を聞いて、まだ自分たちの知らなければならぬ、又しなければならぬ事が殘つてゐるといふ心の重荷をとり去つて、先生方の心に安心感を與へるのに或は幾分役に立つかも知れないと、あれこれ考へ合せ、思い直して、倉橋先生の御言いつけに忠實であらうと決心した次第です。

（1）

ケース・ワーク（case work）と言ふ言葉は、グループ・ワーク（group work）という言葉と共に、戰後アメリカから社會事業の大切な技術として入つて來たものです。それまでにも、ケース・ワークや、グループ・ワークはありましたし、方々で行はれていましたが、これ等が非常に大切なものとして一般の關心を惹くようになると共に、ケース・ワーカ

ーやグループ・ワーカーの訓練や再教育が盛になり、組織的に始められて來たのは戰後の事です。

ケース・ワークを考へる時には、グループ・ワークと離れては考へられない程二つは密接な關係を持つており、二つは車の兩輪の樣に相おぎなつて、一人の人間を立派な人格に、社會に適應出來るようにして行く方法です。ケース・ワークといいますのは平たく言へば問題のある子供、青年、大人を對象にして、何とかその問題や困難を發見して、それをとりのぞき、社會に立派に適應させる方法であつて、これはどこまでも個別指導の方法です。これに對してグループ・ワークと云ふのは、一對一で取扱うのではなく、子供や青年を一つのグループ（組）として組織し、それを動かして行く方法です。皆さんは、幼稚園や保育所で何人か、何十人かの子供を集團として取扱つておられますが、こうした取扱い方も又グループ・ワークの方法の一つであります。ですから皆樣は幼兒に關する限り立派なグループ・ワーカーであると言つてさしつかえありません。それに昔からＹＭＣＡやＹＷＣＡ等で行つてゐました子供をいろ〳〵遊ばせる方法等はみなこのグループ・ワークの中に入ります。公園等で未組織の子供を集めて、保育した綠陰保育等は典型的なグループ・ワークと言えませう。

（2）

ケース・ワークといふ言葉は聞新しい言葉でありますが、ケース・スタデイ（事例研究）という言葉は昔から心理學でよく使いましたから皆さんもよく知つておられると思います

ケース・スタデイ（事例研究）といふのは、心理學の研究方法の一つで、統計的な研究方法と對照して考えるとよくわかります。例へば少年少女の不良化の問題を研究します場合に不良化するような子供達の知能はどの程度であるか、始めて不良化を犯す年齢は何歳頃か、男と女でどちらが多いか、男の犯す犯罪はどんな犯罪か、兩親並つてゐるものはどれ程あり、死別や離婚で家庭の壞れてゐるものはどの程度であり、經濟狀況はどの程度であるかといふ樣な項目について、多くの不良化した少年少女から統計的に結論を出す方法があります。こうした統計的な方法によりますと、不良化をする少年少女達の一般的な特徵がはつきりしています。例へば智能の發達から云へばＩＱで八〇前後の者が多いとか、不良行爲を始めてする年齢は十歲未滿が多いとか、死別によつて家庭を破壞されたものよりも離婚によつて家庭が破壞された場合の方が多いとか云ふ風に、不良化をする少年少女達の一般的特徵といふものが明かになります。しかし、こうした特徵がはつきりしても、これから直ちに、ある特定の子供の不良化の場合の原因が何かといふ事はつかまれません、智能がＩＱ八十前後が不良化し易いと云つても、ＩＱ八〇前後の子供が凡て不良化するわけではありません。不良化のためには個々の子供には、それぞれ個々の原因があります。この原因は何かという事を明にするためには統計的な方法だけではわかりま

せん。統計的な結果は、原因を暗示するのには役に立ちますが、何が原因であるかといふ事をはつきりさせるためには、個々の子供の事例（ケース）を個々に研究して見ることが必要になつて來るのです。

同じような盗みをした子供を例にとつて考えて見ましても家が貧乏なために盗んだ子供もゐるでしようし、他のお友達におどかされたり、そそのかされたりして盗んだ子供もゐるでしよう。或は又友人の中で人並の扱いがされない子供が、何とか人並に扱つて貰いたくて物をぬすんだり、金をぬすんでものを買つてやつたりして友人づき合ひをして貰ふような子供もゐるでしよう。或は中學生の萬引によくあるように、間違つた英雄心から、人のしないこと、していけないこと、それ故に失敗すれば危險の伴うことをやつて、自分の力をためし、ほこりたいために、自分の力の感情を滿足させたいために萬引をする子供もゐるのでせう。このように、外からは同じように見える盗み、不良行爲でも、その原因となることは人によつてそれぞれ異つてゐるのです。それ故に個々の事例について、くわしくその事例を調査しなくては、本當の原因がわかりにくいわけです。こうして盗みなら盗みの事例を詳しく調べて行き、こういう事例を研究した數が多くなつて來ますと、始めて個々の子供の不良行爲の本當の原因がわかつて來るわけです。

（3）

以上の様にケース・スタディ（事例研究）の方法は昔から心理學で使つて來た研究方法の一つでありますが、個々の子供の原因をつきとめ、その子供を個別的に指導するケース・ワークにとつては、どうしても缺く事の出來ない方法になります。

こうして個々の子供の問題の原因が明かになつたなら、その原因をとり去り、反社會性をとり去つて、社會性を與える工夫が考えられなければなりません。その方法としてケース・ワークの方法が出て來ます。個別的に、その子供、家族等を取扱つて行く方法です。しかし、幼兒や兒童、或は青少年を正しく社會に適應させるためには、ケース・ワークの方法だけで充分なのではありません。一つの健全なグループに參加させ、圓滿な社會生活を經驗させる事も絶對的に必要ですから、ケース・ワークと共にグループ・ワークの方法をも用いなければなりません。今迄の一般的な傾向から言えば、普通の子供はグループ・ワークの對象になり、問題兒はケース・ワークの對象になると考へられてゐるようですが、問題兒が本當に反社會性を無くするためにはどうしてもグループ・ワークの手を借りなければならない事は注意しておいてよい事だと思います。（つゞく）